

2024 年度 地域連携推進室 活動報告書

静岡大学 情報学部 地域連携推進室

2025 年 3 月 31 日

目次

1. 室長挨拶	3
2. 地域連携推進室の概要	4
地域連携推進室の目的・業務	4
2024 年度の構成員	4
3. 2024 年度の情報学部における地域連携事業	5
探究・情報ミニ講座	5
高校生探究・情報コンテスト	7
情報学部公開講座 2024	8
アイデアソン&データソン 2024	10
小中学生向けドローン教室	13
外国につながる児童・生徒向けの防災・ドローン教室	15
静岡大学情報学部 学生ボランティア活動	19
(1) 浜松市立雄踏小学校 パソコンクラブでの学習支援	19
(2) 浜松市立追分小学校 パソコンクラブでの学習支援	21
(3) 浜松市立追分小学校 6 年生 理科授業補助	23
情報オリンピック日本委員会主催の地域密着型学習支援講習会「レギオ」	24
浜名湖夏フェスタ 2024 への出展：弁天島における観光防災について WebGIS を活用して 学ぶ機会を提供	25
VR を活用した英語体験学習 ― 高校生との研究室体験会報告 ―	26
世界ロボット大会への出場	27
ボランティア活動およびロボット体験会実験（浜北特別支援学校）	29
浜松市楽器博物館における楽器の 3D モデル化と VR 空間における演奏体験支援プロジェ クト	31
館山寺の魅力再発見プロジェクト	32
都田協働センターまつりでの複合現実を使用した旧石器時代の洞窟遺跡の展示	33
浜松市社会福祉協議会の研修への講師派遣	34
4. 情報学部の地域連携科目	35
地域コミュニティ論/演習	35
情報・コミュニティ論/演習	35
家族福祉政策論	35
フィールドリサーチ	35
博物館実習	36
インタビュー・スキルズ	36

情報学特別講義Ⅰ	36
5. 情報学部教員による地域志向科目（教養科目）	38
わが街・浜松の市政	38
地域社会と情報	38
社会と製造業	38
起業論	38

1. 室長挨拶

地域連携推進室長

今日の大学には、従来の研究・教育に加え、様々な面において地域の拠点として機能する、地域連携の機能が求められています。そうした中、静岡大学としての地域連携に加え、独自の立場から地域連携に取り組むべく、情報学部では平成18（2006）年に情報学部地域連携推進室を設立しました。これまで、学部が立地する静岡県西部地区を中心とした学校や自治体、そして企業等と連携して様々な事業を実施してまいりました。

少子高齢化に人口減少が加わった今日、デジタル田園都市国家構想やDX（デジタルトランスフォーメーション）など情報や通信を象徴する“デジタル”を冠した国家・社会の変革が叫ばれています。“デジタル”こそ、我々が築いてきた情報学の知見が生かされる領域であり、情報学部はそこでリーダーシップを発揮すべき立場にあります。しかし一方では、“デジタル”を基盤とする“AI”などの技術は、国際的な懸念を招く事態にもなっています。

これまでも増して混迷を極める状況において、地域の調和の取れた発展を、“デジタル”の面から微力ながらもお手伝いすることが、地域連携における情報学部の使命です。その達成に向け、地域連携推進室は、地域に開かれた窓口として皆様のご要望やご意見に真摯に耳を傾け、自らのなすべきことを果たし、皆様とともに歩みを進めていきたいと考えています。是非皆様のお声をお聞かせください。どうぞ、よろしくお願い致します。

2. 地域連携推進室の概要

地域連携推進室の目的・業務

本室は、平成19年の「学校教育法」改正により大学の目的に新たな使命が付加されたことに伴い、同法83条2項の理念を「地域連携推進室は、情報学部および総合科学技術研究科情報学専攻の教育力、研究力をもとに地域連携を推進することにより、地域社会の発展に寄与することを目的とする」と本室の規程に明示的に盛り込んでいます。

この目的の遂行のために、本室では次のような業務を行っています。

- (1)教員や学生が行う地域課題に取り組む活動の奨励と支援
- (2)地域連携に関わる活動の情報収集、および教員・学生への情報提供
- (3)教育研究成果を地域に還元するための公開講座等の企画と運営
- (4)市民団体、事業者、地方公共団体等からの地域連携に関わる相談窓口
- (5)全学の関連組織との相互連携
- (6)その他、地域連携に寄与する事項

2024 年度の構成員

2024 年度の地域連携推進室は、下記のメンバーによって構成されています。

室長	教授	白井 靖人（行動情報学科）
室員	准教授	遠山 紗矢香（情報科学科）
	講師	高瀬 奈美（情報社会学科）
	助教	後藤 謙太郎（行動情報学科）
室員（オブザーバ）	准教授	野口 靖浩（情報科学科）
事務補佐員		本村 恵

3. 2024 年度の情報学部における地域連携事業

探究・情報ミニ講座

8月5日(月)9:00～16:00において、静岡大学 浜松キャンパス 共通講義棟 11 で探究・情報ミニ講座が実施されました。本ミニ講座は、2024年11月10日(日)にテクノフェスタで併催される高校生探究・情報コンテストに参加登録した高校生がより、探究に必要な情報を取り扱うための知識に関して学びを深めるためのイベントです。本ミニ講座には、浜松聖星高等学校と静岡県立浜松湖南高等学校の2校から13名の高校生に参加いただきました。

本ミニ講座の内容として、研究活動や課題研究に役立つ基本的な調査倫理、アンケートやインタビューの方法、調査結果の分析について講義が行われました。本ミニ講座は、「定量的調査の方法（アンケート、担当：情報学部情報社会学科 藤岡伸明先生）」と「定性的調査の方法（インタビュー/テキストマイニング、担当：情報学部行動情報学科 遊橋裕泰先生）」の二部構成でした。

参加した高校生からは「実際に手を動かし、学ぶことができた。今後の探究活動にも活かしていきたい」や引率の高校の教員からは「継続して開催して欲しい」といった感想や要望をいただきました。



定量的調査の方法（アンケート）の藤岡伸明 先生の講義の様子



定性的調査の方法（インタビュー/テキストマイニング）の遊橋裕泰 先生の講義の様子



課題に取り組む参加した高校生たちの様子

高校生探究・情報コンテスト

情報学部では、高校生が学校の枠を越えて互いの問題意識を共有し、共に活動を進める仲間を見つけられる機会を提供するため、2023 年度より高校生探究・情報コンテストを開催しています。このコンテストでは、高校生が自身の探究活動を発表し、質問やコメントを通じて学びを深めたり活動を発展させたりする場として企画されています。また、本年度は8月にミニ講座も開催され、研究活動や課題探究に役立つ基本的な調査方法について学べる機会が提供されました。参加した高校生たちは、この講座を通じて研究スキルをさらに高め、コンテストに向けて準備を重ねてきました。

第2回高校生探究・情報コンテストは、テクノフェスタに合わせて11月10日（日）に浜松キャンパスで開催されました。静岡県内外から約100名の高校生や教員が集まりました。45件のポスター発表が行われ、高校生たちが探究の成果を熱心に披露し合いました。審査は大学教員や高校教員、自治体DX担当者、協賛企業の代表など24名が行い、厳正な評価のもと、優秀賞1件、奨励賞4件、審査員特別賞2件などが選出されました。表彰は情報学部地域連携推進室長が行い、受賞者たちに感謝と称賛の言葉が贈られました。

優秀賞：医療崩壊の現実と問題点 ～私たちが作る病院の理想図～

奨励賞：難病患者とのコミュニケーション（ほか4件）



第2回高校生探究・情報コンテストの参加者

情報学部公開講座 2024

市民の方々に情報学部の研究と教育の特色を広く知っていただくため、毎年11月に開催されるテクノフェスタに合わせて、情報学部公開講座を開講しています。今年の講座は、11月9日（土）に対面で実施され、55名が参加しました。

現在、AIは研究室の枠を超え、日常生活で誰もが使う身近な存在へと進化しています。こうした時代をよりよく生き抜くために、どのような準備が必要なのでしょうか。本講座では、情報学部の長年のテーマである「情報とメディア」を再考し、AI時代にどのように向き合うべきかを考察しました。

ミニ講義では、大木哲史准教授（専門分野：情報セキュリティ）による「AIは本当に安全か?AIに潜む脅威と騙しの技術」、大本義正准教授（専門分野：ヒューマンインタフェース）による「人間と共生するエージェントのインタラクションデザイン」、丸山友美講師（専門分野：データベース・社会学）による「敗者たちの想像力が生み出したテレビの100年」というテーマでそれぞれの視点から、AIと情報・メディアの関係を多角的に講義しました。続くパネルディスカッションでは、受講者から質問や感想が寄せられ、意見交換が行われました。AI技術と共に歩む未来に向けて、情報学の可能性を再認識する場となりました。



大木哲史准教授の講義の様子

静岡大学情報学部公開講座2024



AI時代の 情報とメディア

日時：11月9日（土）10:30～12:00

会場：浜松キャンパス共31教室（共通講義棟3階）



AIは本当に安全か？
AIに潜む脅威と騙しの
技術

大木哲史
情報科学科



人間と共生するエー
ジェントのインタラク
ションデザイン

大本義正
行動情報学科



敗者たちの想像力が
生み出したテレビの
100年

丸山友美
情報科社会科

パネルディスカッション モデレーター：白井靖人（行動情報学科）

情報学部公開講座 2024 ミニ講座

アイデアソン&データソン 2024

アイデアソン&データソン 2024

■主催：静岡大学情報学部地域連携推進室

■共催：浜松市広聴広報課／デジタルデジタル・スマートシティ推進課

■コーディネータ：市川博之氏（一般社団法人シビックテック・ラボ代表）

■参加者：23 名（所属：情報学部、静岡文化芸術大学、シビックテック・ラボ）

■日程

・5 月 18 日（土）アイデアソン

・6 月 1 日（土）データソン

■概要

(1) アイデアソン

「学生生活における Well-Being 向上」というテーマでアイデアソンを開催しました。シビックテック・ラボ代表の市川博之氏のファシリテーションのもと、地域幸福度(Well-Being)指標、e-Stat、RESAS、ふじのくにオープンデータカタログといったオープンデータについて学習した後、参加者は関心を共有する 6 つのチームに分けられました。各チームが地域課題の分析・解決にオープンデータを活用する方法についてアイデアを練り、祭の活性化による Well-Being 向上、浜松市の自然と地場産業（養蜂業）を活用した Well-Being 向上、公共交通網の改善による Well-Being 向上等にオープンデータを活用する方法について検討しました。

(2) データソン

5 月 18 日のアイデアソンで提案された 6 つのアイデアについて、それぞれの実現に必要なデータを検証し、データの使用方法を検討しました。最後に 6 つのアイデアとデータ使用方法について発表と質疑応答を行い、審査員（市川氏、浜松市職員、浜松市デジタル・スマートシティフェロー、本学教員）が審査しました。審査結果は以下の通り。

■ 最優秀賞：「やらまいカーニバル」

浜松市内の祭（イベント）情報を案内するためのポータルサイト作成というアイデアならびにそのモックアップ制作。多言語対応による外国人の参加促進、サイトに掲載されていない祭の情報を投稿する仕組み、新しい祭を企画中の団体・個人が浜松市の担当部署や既存の祭の運営者と交流できるようにするマッチングシステムの実装というアイデアが評価されました。

■ 浜松市フェロー賞：「Win-Win-Well-Beeing」

浜松市は養蜂業が盛んであり、複数の養蜂場で蜂蜜および蜂蜜加工製品が製造・販売されています。そこで浜松を「養蜂のまち」としてブランディングしたり、「ミード特区」に指定

したり、ミーダリーツアーのような新たな観光商品を創出したりすることにより、浜松の地場産業と観光業を活性化するアイデアを提案しました。養蜂業や観光業の分析と宣伝にオープンデータを有効活用する点が評価されました。

■ 特別賞：「自動車のまちからバスのまちへ」

持続可能なバスサービスを実現するため、人と荷物の両方を運ぶバスの増加、農村地帯や山間部において自宅からバス停まで人を運ぶ自動運転サービスの拡充といったアイデアを提案しました。公共交通網の現状分析にオープンデータを有効活用した点が評価されました。

データソンには地元ケーブルテレビ局の取材カメラが入り、ローカルニュースでイベントの様子が紹介されました。また、浜松市公式 YouTube チャンネルにもイベント紹介の動画が掲載されています (<https://www.youtube.com/watch?v=z7vl2prjKrw>)。



グループワークの様子



発表の様子

小中学生向けドローン教室

遊橋研究室と藤岡研究室は、浜松 RAIN 房（ものづくり理科地域支援ネットワーク）との共催で、小中学生を対象とするドローン教室「ドローンを知ろう、飛ばしてみよう」を 2024 年 7 月 7 日(日)に浜松キャンパスで開催しました。

教室は 2 部構成となっており、前半はドローンの基礎知識を学ぶレクチャーを行い、後半はドローンの実機を使ったフライト練習を行いました。講師は遊橋研究室と藤岡研究室の学生が担当しました。また、本学部の先端情報学実習「ドローン・プラクティス」を受講中の学生 2 名もアシスタントとして参加しました。

教室には 15 名の参加者（中学生 9 名、小学生 7 名）とその保護者・家族の計約 30 名が参加し、熱気あふれるイベントとなりました。



レクチャーの様子



フライト練習の様子

外国につながる児童・生徒向けの防災・ドローン教室

本学部は、浜松市内の外国人支援団体と連携しながら、外国につながる（外国にルーツを持つ）児童・生徒を対象とする防災・ドローン教室を 2024 年度から開始しました。

2024 年 7 月 31 日には、藤岡研究室の学生と「フィールドリサーチ」（情報社会学科選択科目）の受講生が、浜松国際交流協会（HICE）と静岡県ベトナム人協会と連携して、同協会に所属する小・中学生および高校生を対象とする防災・ドローン教室を開催しました。教室は 2 部構成となっており、前半は HICE 職員と情報学部生が講師となって防災レクチャーと防災クイズを実施し、後半は情報学部生を講師とするドローン体験会を実施しました。前半で防災に関する基礎知識を身につけてもらい、後半で防災・災害時に活躍するドローンがどのようなものか体験・体感してもらいました。教室には約 30 名の児童・生徒とその保護者約 20 名の計約 50 名が参加し、防災関連のイベントとしては異例の盛り上がりを見せました。

10 月 16 日には、藤岡研究室の学生と「ドローン・プラクティス」（先端情報学実習）の受講生が、HICE と浜松市内のブラジル人学校（エスコラ・アウカンセ）と連携して、同校で学ぶ高校生を対象とする防災・ドローン教室を開催しました。教室は 2 部構成となっており、前半は HICE 職員が講師となって防災レクチャーと防災クイズを実施し、後半は情報学部生を講師とするドローン体験会を実施しました。前半で防災に関する基礎知識を身につけてもらい、後半で防災・災害時に活躍するドローンがどのようなものか体験・体感してもらいました。教室には約 30 名の生徒が参加し、楽しみながら熱心にドローンを操縦する姿が見られました。

これらの取り組みを通じて、防災教育と STEAM 教育 (Science、Technology、Engineering、Arts、Mathematics といった多様な分野を横断する文理融合的な学び) の相乗効果を生み出すと同時に、外国につながる児童・生徒が情報学（あるいは文理融合的な学び全般）に関心を持つきっかけを提供することが本事業のねらいです。



静岡県ベトナム人協会の防災・ドローン教室の様子





ブラジル人学校の防災・ドローン教室の様子

静岡大学情報学部 学生ボランティア活動

静岡大学情報学部では、プログラミングや ICT 活用の専門知識を活かし、地域の学校での教育支援を目的としたボランティア活動を実施しています。本活動は、各学校からの依頼を受け、学生が地域貢献を果たす機会としても位置づけられています。2024 年度は、以下の学校での活動を行いました。

(1) 浜松市立雄踏小学校 パソコンクラブでの学習支援

活動概要

- ・ 参加学生：静岡大学情報学部の学生 8 名
- ・ 実施日：
 - ・ 6 月 28 日（金）
 - ・ 7 月 5 日（金）
 - ・ 10 月 4 日（金）
 - ・ 10 月 18 日（金）

活動内容

本活動では、小学生を対象に Scratch を活用した学習支援を行いました。学生ボランティアは、児童と協力しながらデジタルツールの操作方法を教え、プログラミング学習のサポートを行いました。



小学生に支援している様子



課題を説明している様子

(2) 浜松市立追分小学校 パソコンクラブでの学習支援

活動概要

- 参加学生：静岡大学情報学部の学生 9 名
- パソコンクラブの児童：4～6 年生（約 20 名）
- 実施日：
 - ・ 10 月 21 日（月）
 - ・ 11 月 7 日（木）
 - ・ 12 月 10 日（火）
 - ・ 2 月 14 日（金）
- ICT 環境：
 - ・ プロジェクター
 - ・ Google クラスルーム（電子資料配布可）
 - ・ 児童 1 人 1 台の端末（Chromebook）
 - ・ Scratch を利用したプログラミング可能

活動内容

本年度より新設されたパソコンクラブにおいて、学生ボランティアが児童とともにプログラミング学習を行いました。主に Scratch を活用し、基礎的なプログラムの作成をサポートしました。また、クラブ活動を通じて異学年の児童同士の交流を促し、ICT を活用した創造的な学習環境の構築を目指しました。



児童の学習進度にあわせて支援



興味に合わせた課題を提示

(3) 浜松市立追分小学校 6年生 理科授業補助（MESHを活用）

活動概要

- 対象学年：6年生（28名）
- グループ構成：7グループに分かれて実施
- 実施日：2月4日（火）
- 時間：2校時（9:15～10:00）
- 場所：浜松市立追分小学校

活動内容

MESH（メッシュ）を活用した理科のプログラミング授業を実施しました。MESHは、IoT技術を活用した電子ブロック型のデバイスで、児童が直感的にプログラミングを学べるツールです。遠山室員が授業を行い、学生ボランティアは、MESHの操作方法やプログラム作成の補助を行い、児童が自ら試行錯誤しながら学習できるよう支援しました。

本活動では、児童がMESHを活用して実験を行い、デジタル技術を用いた課題解決の方法を体験しました。特に、センサーを用いたデータ収集や自動制御の仕組みについて学び、理科の知識とプログラミングを結びつける機会を提供しました。

情報オリンピック日本委員会主催の地域密着型学習支援講習会「レギオ」

レギオとは、情報オリンピック日本委員会が主催している、国際情報オリンピック参加につながる国内予選参加を目指す生徒に対して、プログラミングとアルゴリズムの基礎的・応用的トレーニングを行うための講習会です。2009(平成 21)年度から開催されており、静岡大学情報学部では 2013(平成 25)年度から 2021(令和 3 年)度および 2023(令和 5 年)の間、会場および講師を担当しておりました。2020(令和 2 年)度よりオンラインでの開催が続いています。2024(令和 6)年 8 月 1 日(木)に入門編、8 月 20 日(火)に初中級編を常葉大学経営学部の先生の協力も受け開催しました。地元の浜松工業高校を始めとした全国各地の 22 の中学・高校から申し込みがあり、1 日に 31 名、20 日に 37 名受講いたしました。講師は、情報学部の小暮悟教授、常葉大学の山下浩一先生、山本頼弥先生が担当しました。

本講座は 2017(平成 29)年から AtCoder 社の全面協力のもと、AtCoder を用いたオンラインジャッジシステムを採用しています。情報オリンピック日本予選においてはオンラインジャッジシステムとして AtCoder が採用されており、講習会においても予選で使うシステムを体験できるようにしています。今年度も一部の受講者はこちらの用意した問題をほとんど解いてしまうなど熱心に受講をしていました。

両日の講習会終了後、情報オリンピック日本委員会理事長の笈捷彦先生からの受講生へのメッセージ動画を遠隔会議システムで再生・配信し、情報オリンピックへの参加が呼びかけられました。

静岡大学情報学部では来年度もレギオを実施予定です。情報オリンピックに興味がある中高生の皆様、来年ぜひご参加ください。

浜名湖夏フェスタ 2024 への出展：弁天島における観光防災について WebGIS を活用して学ぶ機会を提供

情報学部情報社会学科秋元研では2018年度から浜名湖に関する研究プロジェクトを進めており、様々な調査・分析を行ってきました。今回は2023年に引きつづき、2024年にも舞阪町観光協会などと協働して「はまなこ夏フェスタ 2023」(07/14)に出展し、地域貢献を実施しました。展示は WebGIS (情報ツール) を用いて住民や観光客が防災を学習できる「静大生と WebGIS で弁天島の防災について学ぼう！」(主催：静岡大学情報学部秋元研究室)です。教員監修の下、準備からゼミ生が主体的に検討し、事前の安全対策や機器トラブルなどについても繰り返しミーティングを重ねました。

当日の展示では、観光時の防災について学んだ上で、各自で実際に WebGIS を操作する形になっています。その後、弁天島を例として実際に地域を歩きながら学べるルートなども案内しました。終了後は参加者・スタッフの交流も兼ねて、観光防災について振り返り、今後の活動についても検討しました。学生から社会人までご参加いただき、その殆どが弁天島や観光時の防災について驚きの発見をしておられ、地域と参加者の安全向上に寄与することができました。ご協力・ご参加いただいた皆様に感謝を申し上げます。



イベント会場と来場者・説明者



海を背景にスタッフ含め集合写真

参考 Web サイト：

- ・ 舞阪町観光協会「はまなこ夏フェスタ 2023」HP
<https://www.bentenjima.net/umibiraki2024/>
- ・ 舞阪町観光協会「はまなこ夏フェスタ 2023」ポスター
https://www.bentenjima.net/umibiraki2024/2024_chirashi.pdf
- ・ 参考：観光防災 WebGIS (研究室サイト下部より試作版を閲覧可)
<https://www.inf.shizuoka.ac.jp/teacher/akimoto-natsumi/>

VR を活用した英語体験学習 ― 高校生との研究室体験会報告 ―

2024 年 6 月 14 日と 11 月 29 日の 2 回にわたり、静岡県立浜松湖南高校の生徒 16 名と教諭 3 名を対象に、静岡大学高瀬研究室にて「研究室体験会（仮想空間内の言語活動と言語習得）」を実施しました。

この体験会では、まず VR 機器の基本操作を説明した後、VR アプリを使って留学生による英語での観光案内を体験しました。参加者は 3 グループに分かれ、高瀬研究室のゼミ生がサポートしながら、与えられたタスクに取り組みました。本研究室では、複数のメディアを活用した言語活動が第二言語習得に与える影響を明らかにすることを目的としています。今回の活動では、高校生が通常の教室環境とは異なる言語使用の機会を得ることで、英語による発話練習の楽しさや、対面での練習との相違点を体感していました。

体験中に体調を崩す参加者はおらず、安全に実施することができました。また、参加者からは「VR 内では緊張がほぐれ、会話が弾みやすい。視覚的な情報も多く、話題もあるので話しやすい」「対面は苦手だけど、VR の中では自分の世界に入れる気がして、いつもよりよく話せた」といった感想をいただきました。

この取り組みは、令和 6 年度「女子中高生を対象に含む研究室体験（静岡大学男女共同参画推進室）」の支援を受けて実施されました。



研究室体験会（2024 年 6 月）

世界ロボット大会への出場

本学部の佐治斉教授が浜松地域の学生2人とチーム（チーム名 Ultra S）を組み、ロボット分野で世界最大級の大会 World Robot Olympiad(WRO)に出場しました。学生の1人は本学工学部機械工学科1年生で、本学が推進している浜松 IT キッズの卒業生であり、もう1人は静岡県立浜松北高等学校の2年生です。佐治教授はチームコーチという立場で参加しました。出場した競技は、テーマに沿って自作したロボットについて説明し、その内容が審査される Future Innovators 競技です。Ultra S は、ドローンと地上ロボットを連携させた災害情報収集ロボットを開発し、7月上旬に大会にエントリーしました。8月上旬に事前審査を通過し、8月24日と25日に富山市で行われた WRO Japan 決勝大会に出場しました。決勝大会では8名の審査員の前でプレゼンを行い、優秀賞を獲得しました。その成績により日本代表に選拔され、11月28日～30日にトルコ共和国イズミールで行われる世界大会に出場することとなりました。世界大会は、与えられたブース内で、審査員（2名）への説明と質疑応答を英語で計4回行い、その合計点で順位が決まる形式でした。成績は49チーム中7位となり入賞し表彰されました。帰国後の1月7日に、浜松市役所で中野祐介市長に大会での活躍の様子を説明しました。浜松地域では本学を中心とした若手人材への IT 教育が盛んであり、その成果が今回のロボット分野の世界大会での成績につながったと思われます。

新聞報道：

- ・静岡新聞：2024年12月15日世界ロボコン 浜松の兄妹7位入賞 小中高生年代大会に挑戦10年、ラストイヤーで開花 災害活動想定し車両型開発
- ・中日新聞：2025年1月10日 ロボットプログラミング国際大会 浜松・佐治兄妹入賞



浜松市長表敬訪問



世界大会 Japan ブース

ボランティア活動およびロボット体験会実験（浜北特別支援学校）

教育学部元教授である岡本康哉先生が主催したラウンドテーブル（2024 年 9 月 30 日）をきっかけとして、行動情報学科森田研究室に所属する西川純平さん（博士課程 3 年、学術振興会特別研究員）が浜北特別支援学校でのボランティア活動に参加しました。2024 年 11 月から 2025 年 2 月にかけて、祝日等を除く毎週月曜日に訪問し、授業の実施を補助しました。

ボランティア活動の最後（2025/2/12、13、18-20）には、西川さんの研究テーマであるコミュニケーションロボットを持ち込み、児童・生徒に対するロボット体験会（フィールド実験）を実施しました。児童・生徒に、2 体のロボットがしりとりをしながらジェスチャする様子を観察してもらい、彼らがロボットに対してどのような注意を向けるのかについてのデータを収集しました。このロボットがしりとりにおいて選ぶ単語や発話に伴う動作は、人間の記憶や言語に関する情報学的な理論に基づいています。それらの理論から導かれる反応が、現場のデータに実際に含まれるかどうかを検証しました。この研究の結果は、HAI シンポジウム 2025（3 月 1 日）、認知科学会計算認知科学研究分科会（3 月 16 日）にて発表されました。



特別支援学校の生徒から学生へのお礼の手紙（左）と、学生から生徒へのお礼のビデオメッセージのスクリーンショット（右）

https://youtu.be/P29UL_2EEiU?si=hmk2z9oYw0Dm3fUR



ロボット体験会の特別支援学校による広報投稿 https://www.instagram.com/p/DGNG-h0PTkT/?utm_source=ig_web_copy_link&igsh=MzRlODBiNWFlZA==

浜松市楽器博物館における楽器の 3D モデル化と VR 空間における演奏体験支援プロジェクト

本プロジェクトは、2023 年度からの継続で、浜松市楽器博物館と連携して、楽器の魅力をより伝えるため、浜松市楽器博物館にある貴重な楽器を 3D モデル化して、さらに、音収録、これらを使い、VR 空間における演奏体験システムを構築する事業です。今年度は、テルミンを VR 空間上で演奏できる VR 楽器演奏体験システムと Web 上で演奏できる Web テルミンを構築して、体験会を開催しました。

なお、本プロジェクトは令和 6 年度 静岡大学 地域連携応援プロジェクト「浜松市楽器博物館における楽器の 3D モデル化と VR 空間における演奏体験支援事業」（代表：杉山岳弘）採択事業です。また、先端情報学実習「地域資源情報のデジタル化と活用に関する研究」の一環でもあります。

新聞報道：

- ・2024 年 12 月 16 日 中日新聞、テルミン VR 体験 静大生の開発システム使用

杉山岳弘研究室の Web ページ：

<https://www.sugilab.net/>



イオンモール浜松市野での体験会の様子

館山寺の魅力再発見プロジェクト

本プロジェクトでは、浜名湖かんざんじ温泉観光協会と連携して、学生が中心となり、館山寺地域の地域活性化を目的として、2025年1月25日に新名物アイデアソン in 館山寺、2024年12月1日から2025年2月1日まで館山寺レトロフォトコンテスト～2024 冬～を実施しました。このアイデアソンには静岡大学、静岡文化芸術大学、浜松学芸高校、浜松聖星高校、浜松湖南高校、浜松商業高校の学生・生徒が参加し、ワークショップ形式で館山寺の新名物を考え、発表しました。このアイデアソンの取り組みは中日新聞(2025年1月31日)と静岡新聞(2月6日)に掲載されました。

なお、本プロジェクトは、先端情報学実習「地域資源情報のデジタル化と活用に関する研究」の一環でもあります。

新聞報道：

- ・ 2025年1月31日 中日新聞朝刊 館山寺新名物 アイデア競う
- ・ 2025年2月6日 静岡新聞朝刊 館山寺の新土産 学生がアイデア

杉山岳弘研究室の Web ページ：

<https://www.sugilab.net/>



新名物アイデアソン in 館山寺の様子

都田協働センターまつりでの複合現実を使用した旧石器時代の洞窟遺跡の展示

2025 年 1 月 26 日（日）、都田協働センター体育館にて「都田協働センターまつり」が開催され、複合現実を使用した旧石器時代の洞窟遺跡の展示が行われました。本イベントには、情報科学科の加瀬裕貴助教、青木徹教授、および情報社会学科の村野正景准教授が参加されました。人文社会科学部社会学科の山岡拓也教授のご協力のもと、静岡県浜松市にある行者穴遺跡の発掘調査により収集された遺物を題材に、複合現実(MR)技術を活用した展示を行いました。

会場では、来場者に向けて旧石器時代の洞窟遺跡の様子を再現した VR 体験展示を実施しました。展示では、出土した遺物を X 線 CT でスキャンし、8K カメラによるフォトグラメトリを用いて三次元可視化を行いました。さらに、空間再現ディスプレイやモーションキャプチャーを活用したインタラクティブなコンテンツ展示も行いました。

これにより、来場者に対して考古学研究への理解を深める機会を提供するとともに、文化財への関心を喚起し、地域との連携促進にも貢献しました。



都田協働センターまつり出展の様子

浜松市社会福祉協議会の研修への講師派遣

情報学部と浜松市社会福祉協議会との包括的連携協定にもとづき、同社協の研修に情報学部教員を講師として派遣しました。講師を派遣したのは「アンケート調査とデータ分析の基礎」をテーマとする研修であり、同研修への協力要請を受けて、情報学部は情報社会学科の藤岡伸明准教授を派遣しました。同准教授は浜松市社協との事前協議を踏まえて、①アンケート調査とデータ分析の基礎を理解する、②統計的仮説検定の実例に触れる、③社協内部で過去のアンケート調査について情報共有と意見交換を活発に行うためのきっかけを提供する、という3つの目標を設定し、11月20日（水）13:30～16:30に浜松市福祉交流センターで研修を実施しました。研修には浜松市社協の各事務所・センターから27名の職員が参加し、座学と演習を交えた研修を通じてアンケート調査とデータ分析の基礎を学びました。研修参加者の満足度も高く、事後アンケートでは9割以上の回答者が研修内容を好意的に評価しました。特にExcelを用いて過去のアンケート調査データを集計・グラフ化・分析する演習への好意的なコメントが多く見られ、情報学部の授業（「データ処理演習」「統計学入門」など）を通じて蓄積された教育方法やノウハウを地域社会に還元する格好の機会となりました。

4. 情報学部地域連携科目

地域コミュニティ論/演習

本科目では、人間集団や社会・文化の成立、歴史と深く関わるコミュニティ概念について、社会科学の理論や方法を踏まえて学んでいます。日常に身近でありながら「遠い」存在にもなっている対象や場（災害、家族、地域社会、祭り、市民協働、NPO、職場）を取り上げ、その具体例を通してコミュニティをいかにデザインするかを考えていきます。その中で、地域コミュニティの実態を学ぶためにフィールドワークを行い、コミュニティの今日的課題を把握していきます。特に、浜松市市民協働センターや浜松まつり会館といった学外のフィールドに赴き、調査や観察を通して情報収集を行なっています。

情報・コミュニティ論/演習

情報・コミュニティ論では、情報という観点からコミュニティを考察することにより、近代以降の社会に現れた様々なコミュニティの理解を深めています。講義では、浜松市の外国人コミュニティや静岡県内の災害復興支援活動などを事例としながら、現代における地域課題の発見・分析に取り組んでいます。情報・コミュニティ演習では、地域連携推進室のアイデアソン・データソンと連携しながら、情報・コミュニティ論で扱った地域課題の分析・解決のためにオープンデータをどのように活用できるか（活用すべきか）について、グループワーク形式で考えています。

家族福祉政策論

本科目では、「福祉」概念を深く理解したうえで、生活者の視点からコミュニティをデザインをしていくために必要な視角と諸知識を学んでいます。毎回の授業では、児童福祉や高齢者福祉といった地域課題に取り組んできた実務家を講師やゲストとして招き、それぞれの経験に基づいた講義をしていただき、地域の福祉課題について学生に考えてもらっています。

フィールドリサーチ

本科目では、「社会調査法」等で学んだ諸技法を活かして、調査を企画・実施できる力を身につけるとともに、調査対象者（協力者）に対する共感性を養うことを目標にしています。学生は、地域調査を実施し、行政、企業、地域・住民組織、NPO 等、さまざまな分野で活躍しておられる地域の方々にインタビューを行っていきます。近年は防災・災害対策をテーマに、聖隷浜松病院、静岡県浜松土木事務所、浜松市危機管理課等にご協力いただき、調査を実施しました。

博物館実習

博物館学芸員資格取得のための科目であり、博物館資料の収集、保管、展示、調査研究、その他博物館学芸員の諸業務を実際に体験することで、理解を深めます。学内実習では、文献、絵画、工芸品等の各種資料を用い、その取り扱い、調査研究等について実習します。また学内における小展示を企画、実施します。見学実習では、7か所以上の博物館施設等の見学を実施します。

インタビュー・スキルズ

この実習では、社会や地域の課題を社会調査を通じて理解し、情報の発信者としての視点や素養と、社会に対して情報発信していくための知識と技術を実践的に学びます。学生は、実社会の問題を取り上げて社会調査を行い、自らの問題意識に基づいて情報を構成し、メッセージを込めたメディア作品を制作していきます。近年は、浜松市内の建築・不動産会社、子どもと家族の支援活動をしている一般社団法人、飲食店、写真館などにインタビュー調査を実施して、ドキュメンタリー映像を作成しました。

情報学特別講義Ⅰ

本科目では、企業、行政、メディアなど、特に地域情報化の現場で生じている現象や課題を知り、それに応えるためにどのような形で情報学を深めるべきかについて理解を深めていきます。そのために、情報化の最前線に対応する企業や自治体で働く方々に、それぞれの現場の実態と課題をお話しいただいています。近年は、静岡県を代表するメディア企業である静岡新聞社・静岡放送(SBS)の方々を講師としてお招きし、メディアの現場における業務の実態や課題について講義していただき、地域メディアの意義と役割についての理解を深めています。



情報学特別講義I 授業の様子

5. 情報学部教員による地域志向科目（教養科目）

わが街・浜松の市政

全学教育科目の一つであるこの科目では、浜松市の職員を毎回講師に招き、浜松市の現状や課題、市の施策について学んでいきます。都市計画、産業、育児、防災、環境、多文化共生、行財政改革など、様々な分野において現場に携わっている方々の話を聴くことで、私たちの生活に密接に関わる地方行政の実際について理解を深めることができます。

地域社会と情報

全学教育科目の一つであるこの科目では、地域社会における情報の役割について、浜松市の事例を中心に学んでいます。授業では、企業、政府機関、自治体、社会福祉協議会、NPOといった様々な組織で働く専門家をゲストとしてお招きし、地域社会の中で情報がどのように生まれ、機能して、どう社会に役立っているか、また、様々な情報が社会や地域の人々の生活にどのように影響しているかについて講義していただいています。

社会と製造業

本科目では、日本の製造業を対象に「ものづくり」とは何かを考え、製造業に関する基本的な知識を身につけるとともに、学生が卒業後、製造業やその関連産業で活躍できる素養を身につけることを目指します。また、産業革命を含む製造業の歴史的な変遷と現在の産業における位置づけ・役割などを学びます。浜松は地域的に製造業が盛んです。産業史を専門とする大学教員や地元製造業の現場で活躍した本学の卒業生を講師に迎えて開講しています。

起業論

本科目は学際科目の一つで、情報学部と工学部の学生を対象としています。科目名に“起業”とはありますが、実際のところは世の中をより良いものにしようとする姿勢を持ち続けることの重要性を説く科目です。この授業をとおして、身の回りから、地域、国、広くは世界にまで目を向けて、そこに潜む課題を明らかにし、その解決に向けてチャレンジを続ける強い気構えを持ってもらいたいと願っています。